

3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) デルフィニウムの栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント) デルフィニウムの栽培管理 シンテッポウユリの播種、育苗 1～3月出荷用電照ギクの温度管理</p> <p>本県の主力品種である‘ガンマーアーミー’と‘ブルーマジック’は、二番花の生育中期～発蕾期(採花予定は2月中～下旬)になるため、次の栽培管理に注意する(写真1)。</p> <p>ア 水、施肥管理 かん水は、二番花の発蕾期までは土壌を乾かさないように定期的を実施することで花茎の伸長を促す。出蕾後は花穂が間延びしないようかん水は徐々に控えていく。</p> <p>施肥は、有機配合肥料を2～3週間おきに窒素成分で5～6kg/10a施用し、肥切れを起こさないように注意する。</p> <p>イ 葉かぎ 出蕾期からは、次の三番芽の分化、発達を促すために徐々に葉かぎを行い、株元に光をあてるようにする。なお、葉かぎの程度は、最終的に地際部から20cmの高さを目安として実施する。</p> <p>ウ 温度管理 花茎の伸長を促すために、夜温は12℃を確保することを基本とし、10～14℃の間で生育が速いときは低め、遅いときは高めの温度で調整するよう心がける。</p> <p>また、日中の温度も花茎伸長期には換気温度を25～28℃と高めに設定し、蒸し込んだ条件下での管理とする。その後の花穂発達期には換気温度を20℃まで下げ、側窓換気により植物体に風をあてることで、締まった切り花に仕上げていく。</p>



写真1 二番花の出蕾期を迎えたデルフィニウム

項 目	作 業 内 容
<p>(2)シンテッポウユリの播種、育苗</p>	<p>本県の主要露地花きであるシンテッポウユリは、7～8月出荷するために早生・中生品種を1～2月にかけて播種する必要がある(写真2)。</p> <p>ア 播種方法</p> <p>本圃には約3,000本/aの苗を定植するため、種子はその1.5～2倍を準備する。播種は、セルトレイ(128～200穴)による1粒播きか育苗箱によるすじ播き、ばら播きなどの方法があり、後者は適宜間引きを行う必要がある。播種後は砂、パーミキュライト等で種子が隠れる程度に薄く覆土する。</p> <p>イ 発芽までの温度管理</p> <p>シンテッポウユリの発芽適温は15～20で、これより高くても低くても発芽勢、発芽率が劣るので発芽揃い(約1ヵ月)までの温度管理には十分注意する。実際には、発芽開始までは保温と乾燥防止のためにトレイをポリエチレンフィルムなどで被覆し、電熱温床で集中的に温度管理を行えば苗の揃いが良好になる。</p> <p>なお、種子を5～20日程度の低温条件で催芽処理すると発芽力が向上し、25℃程度の高温条件下でも通常の半分の期間で発芽揃いとなり、育苗期間の短縮と管理の省力化が図れる。</p> <p>ウ 発芽揃い後の管理</p> <p>日中は25℃以上の高温にならないように換気し、夜間は5～10℃を目標に管理する。蒸し込んだ状態が続くと苗立枯病が発生するので注意する。</p> <p>かん水は、幼苗期はやや控え、本葉展開時から成苗(本葉3～4枚)になるまでに生育に応じて量を増やし、同時に500倍程度の液肥も定期的に施用する。</p> <p>箱播きでの間引きは、子葉期と本葉2～3葉期の2回に分けて行う。1回目は込み合った部分を間引き、2回目は形質の</p>



写真2 本葉1～2枚のシンテッポウユリ(セル育苗)

項 目	作 業 内 容
(3)1~3月出荷用電照ギクの温度管理	<p>均一化を図るため、葉幅が極端に細いもの広いものを間引く。</p> <p>1~2月出荷用の電照ギクは、生育ステージが最も低温害を受けやすい時期となるので、夜間の温度は‘神馬’など高温性品種では発蕾期 13、花弁伸長期 15 を保つよう加温する。</p> <p>3月出荷用電照ギクは生育ステージが花芽分化期にあたるので、‘神馬’など高温性品種では消灯の7日前から夜間 15、消灯の2~3日前から 18 で3週間加温し、‘花秀芳’など中温性品種では消灯の7日前から夜間 12、2~3日前から 15 で3週間程度加温する。</p> <p>また、昼間は白さび病の予防のため極力換気に努め、室温が 25 以上にならないように管理する。</p>

(作成 農林水産研究所)